

序

辻本雅史

私たちは、台湾の地において「日本研究」を発信している。日本の「外」から、「日本」という地域を対象に研究し、「日本」を問題にしているのである。それは、日本国内で日本を研究する立場とは、おのずからスタンスが異なってくるだろう。それはどのように意味において違ってくるのか、いまそのことを考えてみたい。そのためには、日本国内における日本研究、たとえば日本歴史、日本思想（史）、日本語、日本文学などといった研究と比較してみることで、ある程度その違いが見えてくるに違いない。

大雑把な言い方ながら、日本国内で日本研究を行っている（おもに）日本人研究者にとって、「日本とは何か」という問いを発することは、普通にはまずない。あつたとしても希薄であろう。かつて私もそうであったように、彼らにとって日本とは、説明を要しないほどに自明に属することがらである。日本に生まれ育ち、日本語の母語話者として、日本の言語や一定の文化や生活様式などを、無意識のうちに自己の内に身体化しているのが普通だからである。日本にとっての「他者」を意識する必要のない世界に生きてきたといってもよいだろう。

研究には、その研究に取り組むだけの固有の意味や文脈が、

2 思想史から東アジアを考える

当該研究者には自覚されているが、上記の日本研究者にとっての研究の意味や文脈は、ほぼ日本国内から発する課題に求められる。その結果、自覚するかどうかは別として、彼らの日本研究はどうしても内部に閉じられた傾向を脱することは難しい。そこで意識される「他者」とは、おおむね日本という領域内の他者を越えることはほとんどない。日本国内の人ならある程度共有できる、あるいは日本人にしか共有できない種類の研究となる傾向が免れがたい。こうした研究と研究集団が国際化することは容易ではない。確かに研究の精度はあがり、実証のレベルは緻密で精密になっていくだろう。しかしそこでの問題が、国（当該地域）や言語、文化を越えて、広がっていくことは難しい。日本人が会員の大半をしめる日本の学会が、いかに小さな問題を細かく議論しているか、一度その学会の研究発表大会をのぞいてみれば、容易に理解できるであろう。（筆者も含めて）そこでの使用言語は、日本語に限られている。いわば「一国史研究」の状況がここにある。これだけグローバル化が進んだ現状の中でも、日本から発信される日本研究が、国の領域と言語を越えて国際化されることは、依然として希少である。

その背景には、日本国内の研究市場はそれを自足させる状況がある。換言すれば、上記の現状において、日本研究をする日本人研究者は、研究者として生きていけるだけの自足的空間が存在している。そうした研究空間における日本研究とは、結局何を生み出しているのだろうか。いわば無自覚なままの「日本の自己像」とその再生産であるだろう。それはいわば「他者」不在の、国内的な問いに応じた「自己像」にすぎないだろう。

もとよりこれまでの研究史をひもとけば、そうした日本研究に意味がないというのではない。確かに時代の求めに応じて、一定の「自己像」を描いてきた。たとえば「日本思想史学」という学問の成立は、日本が世界の中で欧米に対峙できる応分の位置を占めた第一次世界大戦後のことであり、世界で「日本とは何か」が問われ始めた時にあたっていた。そのほかの学問領域でも、類似の状況があったことは、歴史的に跡付けできるはずである。さらに中心的に取り上げられる研究主題にも、それぞれの時代状況の問いに応えようとする意味があったことも間違いないだろう。もとよりそれを否定するものではないが、いずれにしても、日本が内部的に抱えた問いに対する応答という文脈から脱することはない。¹

以上のことは、裏を返せば、「外」から日本を対象とする研究には、上記の日本人による日本のための日本研究とは異なる意味と文脈があるということでもある。つまり台湾から日本を見る研究は、台湾に固有の視角があることを自覚し、意識している。それは、台湾が日本といかに関わるのか、それが歴史的であれ現代的であれ、台湾と日本との関係性と深く関わってくる視角である。さらにただ台湾と日本との関係性にとどまらず、

¹ ただしそうした状況を自省的にとらえ、自覚的にそれを脱する研究の潮流がないわけではない。むしろ研究領域によっては、すでに相当の成果を上げていることも事実である。東アジア圏域での国際的な学術交流の活発化の中で、それは確実に増加してきている。そうした研究の潮流と相互に連携しながら、台湾からの研究発信の独自性を育てたいと念じている。

4 思想史から東アジアを考える

東アジア、大きくは地球世界という広がりの中で、台湾の在り方を問う問いが、日本を問うことに相関して、成立するはずである。否、「成立する」というよりも、そうした回路、すなわち台湾を、広がりのある空間の中で考えるために、あえて日本を問うという回路を、自ら「創りだす」ことが必要であると考ええる。台湾から日本を問うという問いが、実は東アジアの抱える多様な諸問題を考える問いと、内在的に関わってくるからである。各地域が無関係に孤立して存在したことなど、かつてなかった。とりわけ台湾は、地政学的にも常に外との関わりにおいて揺れ動いてきた。その意味で台湾には、世界史の普遍的な問題が凝縮して存在している。そのことを思えば、台湾からの問いであるからこそ成立する、独自の意味ある問いや課題が必ずあると考えられる。それを端的に「台湾的特色を持つ日本研究」と呼ぶとすれば、そうした研究こそ、台湾だけでなく、日本さらには東アジアの研究に積極的な貢献ができるはずである。

もちろん台湾だけが問題ではない。上記のことは、日本を「外」から見るいずれの日本研究にも通底している。とりあえず東アジアの中で考えても、韓国から見る、中国から見る、あるいは琉球から見る、さらには西欧から見る等々、複数のさまざまな日本研究の在り方があること、その「外」から見る視点のそれぞれがもつ複数の文脈と意味が、重なったりずれたりすることが重要である。歴史的関係性からあるいは現代的観点からも、東アジアの広がりの中で、日本研究を考えることには、確かにこれまでも一定の蓄積がある。そうした蓄積を我々は共有し、

複数形の日本研究を重視したい。こうした「外」から見た日本研究を、ここではさしあたり「国際日本研究」と称しておきたい。

「国際日本研究」は、以上述べてきたように、「日本人による日本研究」とは異なる視角で日本を問う研究を含んでくる。実はそれこそが、日本の日本研究の自閉的なあり方に対して強いインパクトを与える。そのためには、東アジアの日本研究を相互につないでいく国際的ネットワークの緩やかな研究組織が期待されるが、少なくともその前提に、外から発信できる日本研究が求められる。本論文集は、そうした意図を意識しながら編んだものである。

以下、おもにそうした観点から、収録論文に関して、編者の意図と若干の意味づけをこころみる。

第一章：東アジアの「近世」から中国の「近代」へー比較史と文化交流史／交渉史の視点による一考察ー

清代を中心とした中国思想史研究者の伊東貴之氏の時代区分論である。時代区分はたんに時間の区切りではなく、歴史認識に関わる問題である。「近世」という時代、すなわち前代の「中世」および次の「近代」と切り分けて「近世」をどのように考えるか、それを、中国を中心にしながら、中国と密接な影響関係にある日本や朝鮮の在り方と比較しながら、さらに西洋の歴史区分も念頭に置いて、おもに思想史・文化史的視角から議論している。なかでも研究史の論点の整理が実に丁寧で、その膨大な参考文献リストも含めて、大いに理解の助けになる。とくに中国における 17 世紀の「明清交替」が東アジア規模での歴史

的な地殻変動を惹起し、「前近代東アジアのグローバリゼーション」状況を現出したとの指摘は、インパクトのある見解である。緻密な研究をつないで大きな議論をする明快な論文である。

第二章：東アジアの近代的知形における東西融合の類型再考

西洋哲学にも造詣の深い李光来（イ・クワンレイ）氏が、東アジアの諸地域が西洋の近代知との出会い、それぞれいかに対峙したのか、それを類型論的に整理した論文である。本論文の特徴は、東アジアにおける中国・日本・韓国諸地域の東西融合、具体的には中国の「中体西用」論、日本の「和魂洋才」「東洋道德西洋芸術」論、韓国の「東道西器」論などの概念や思惟形態などの類型が比較される。ラカンの精神分析学にもとづく自他認識（他者＝西洋と出会うことで認識される自己）の分析や、生命体の自己免疫体系の用語や概念を応用して、思想の類型とダイナミズムを比喩的に説明しそれぞれの特徴を鮮明に描き出す、ユニークな見方を提示している。「近代的知形」などの表現にも、独特の発想が示されている。以上の2章は、非常に大きく鳥瞰する視点から、東アジアの思想や文化が論じられている。

第三章：近世東アジアの〈教諭〉思想と日本社会

中村春作氏は、日本儒学思想史研究者であるが、一国思想史を越えた研究を早くから自覚的に発信してきた。つまり日本近世・近代儒学の意味を、日本という圏域を越えた視点（東アジアの歴史空間の視点）から先鋭的に問題提起してこられた先駆者である。近年は琉球儒学を対象にすることで、東アジア全体

に広がる議論を展開されている²が、本論文もその一環である。琉球が東アジア儒教圏域にあったことは周知でありながら、これまで見るべき研究の進展がなかった。本論文は、琉球儒学が朱子学による社会教化すなわち〈教諭〉政治の性格を特徴としていることを確認し、その視点から日本および中国の儒学の意味を問い直す論点を提起している。すなわち儒者の経書解釈の知的革新性や先鋭性に目を奪われてきたこれまでの東アジア思想史は、一定の「偏り」が免れず、これまで見落とされてきた儒学の社会思想史的側面に注目し、〈教諭社会〉という観点を提案している。広がりのある大きな議論が注目される。琉球儒学の持つ独自の特徴が、東アジア思想史研究に新たな視点をもたらせたのである。

第四章：東アジアにおける新文化の形成と伝統—日本の近代化を例にして—

日中儒学比較思想史の領域で顕著な業績のある銭国紅氏の本論文は、東アジアの伝統を共有する儒教が近代、現代の社会といかに関係しいかなる意味をもつのか、その問題を比較思想・比較文化の観点から探ろうとする試みである。その際、とくにその背景となる宗教的性格（中国の場合「一天多神」）との関係に留意される。実際には福沢諭吉の天観念と大妻良馬（大妻学園創始者）の信仰と近代化の問題を比較しながら語ら

² 琉球は台湾は、いずれもユーラシア大陸の東側に南北にのびる（千島—北海道からインドネシアに及ぶ）弓形の列島の中心部に位置しており、地政学的に共通する面と異なる歴史をもつ面があり、相互に比較考察する意味があると思われる。

れる。要するに近代・現代における東アジアの儒教の多様な展開とその姿は、各地域や国、個人のあり方を映す鏡となるという。現代的な問題関心を念頭においた比較思想的な方法的提起と論点が示されている。

第五章：帝国日本の越境統治における歴史・思想政策の変遷—台湾・朝鮮・満州国の日本語教育と「同化」「皇民化」を中心として—

徐興慶氏は、これまでおもに人物を通した日中および東アジアのダイナミックな思想・文化交流史研究を主導してこられたが、本論文は、帝国日本の植民地支配の特質を、とくに言語政策と教育政策を素材にして、台湾、朝鮮、満州国の支配地に即して、横断的に比較考察している。同じく帝国日本の植民地支配地ではあっても、三地域は必ずしも一様ではなく、それぞれに独自な特徴があることなど、それらを、これまでの研究蓄積をていねいに紹介しながら手際よく整理して、そのもつ意味について比較考察されている。その後の歴史過程や近代化との関わりを考えるためにも、共通した視座を設定して、三地域を通観する比較史的考察の有効性が説得的に提示されている。

第六章：丁若鏞と荻生徂徠における「寛容」の技術—朝・日儒者の近代性への視座—

李基原（イ・キオン）氏は、先に、丁若鏞の朝鮮実学のうちに、日本の徂徠学のインパクトがあるということを実証した業績がある。本論文は、その研究のさらなる展開として、徂徠と丁若鏞の両者の思想のうちに、近代に向かう思想という点で共

通性が認められることを論じている。その比較の視座として、李氏は「寛容(tolerance)」という概念に「近代に向かう思考」の展開を想定している。「寛容」という超歴史的な概念に「近代」への思考を見出す問題構成には議論の余地があるかもしれないが、比較の視座を明確に設定している方法と、経書の主要な概念の解釈の違いを丹念に検討している手堅い実証性は、比較思想史研究として意味ある成果を見せているといえよう。

第七章：十九世紀前半日本における「議論政治」の形成とその意味—東アジア政治史の視点から—

朴薫（パク・フン）氏は、幕末維新期の政治史的分析に新たな観点を導入し鋭い議論を展開して注目されているが、本論文もその成果の一部である。幕末日本の「議論政治」の形成過程と、忌憚なく国王政治も批判した「言官」制度のある朝鮮王朝の「公論」形成システムを押さえるうえで、おもに水戸藩（次いで萩藩や土佐藩）の実際の歴史過程を分析する。その上で、日朝の政治文化を比較史的に論じている。従来の政治思想史のような、思想の論理や言説の中身の独創性などに注目するのではなく、政治コミュニケーションや政治メディア（たとえば議論・会議の「場」や上書・直書などの意思疎通の「メディア」）の機能に注目し、「公論」や「公議輿論」及び新たな「政治慣習」の形成過程を議論に組みこんで「政治文化」を語るその論点は鮮やかで、政治文化史研究の新たな方法と研究成果が提示されている。本論文の視点によって、たとえば日本近世における儒教的教養が18世紀末から19世紀にかけていかに重要な意

味をもっていたか、あるいは幕末になぜ下級武士が政治主体として登場してくるのか、こうした問題も明快に説明されるにいたる。比較研究の方法論にとって、重要な示唆に満ちた論文である。

第八章：江戸時代における漢学学問方法の発展—十八世紀を端緒とする書誌学・目録学、そして原典批判の伝統—

竹村英二氏はおもに英語圏で研究を深められてきた日本思想史研究者であり、日本思想史の国際化に貢献されておられる。本論文は、江戸日本の漢学の学問方法がいかに近代知性と接続したかを独自の視点から問うた研究である。儒学が西洋近代学術といかに接続したのかどうかという主題についてはこれまでも多く問われてきた論点である。しかし本論文は、これまで多くがそうであったような、思想内容や哲学的な思想解釈による接続論ではなく、漢学という知の方法とその実践が、いかなる領域でいかに接続したのか、という問いを多層的構造的に問題化しており、その点できわめて斬新である。本論文の直接の対象は、日本の幕末—近代の漢学であるが、本論文の視点と方法は、東アジア儒教圏域のなかでの比較考察に道を開く可能性に満ちている。

第九章：近世日本思想史における翻訳の役割

アニック堀内氏は、フランスから日本近世思想や学問に独自のまなざしを向けてこられた。本論文は、これまでの日本の思想史に、「翻訳」を正面から対象にした研究が欠落していることを指摘し、思想史・学問史研究における翻訳研究の重要性を

主張している。それを、蘭学を例として説明する。蘭学の本質が翻訳にあり、蘭学研究における翻訳という知的営為の意味を、蘭語や英・仏・露語に通じた幕府の翻訳官・馬場佐十郎のロシアに関する蘭書の翻訳書『帝爵魯西亜国誌』に即して論証している。これまで、翻訳の問題が軽視されてきた研究状況に一石を投じる論文である。確かに翻訳の問題は、異文化間の交流になくてはならない要因である。たとえば近年注目されてきた漢文訓読という主題は、日本語では本来読めない漢籍を、日本語文法に変換して訓読する読書法の意味を考えることで、それも広義の翻訳の問題ととらえることもできる。知の伝達を考える際に、その伝達メディアの視点からいっても、翻訳は本質的な問題を構成するだろう。³今後、国際日本学研究所の立場から、大いに注目される主題となるに違いない。

本書に収録の論文は、おもに台湾大学日本研究センターにおいて開催された国際学術研究会等で発表された論文であり、そのなかから、上記の意図に沿った論文を選んで本書を編んだ。各論文はそれぞれの国際会議の主題に沿って執筆されたものである。そのため論文執筆の動機や意図は一樣ではないし、研究領域も多岐にわたっている。しかしすべてに共通しているのは、一国史を越えた視点を強く保持していること、そして東ア

³ 訓読の問題については、中村春作他編『「訓読」論——東アジア漢文世界と日本語』（勉誠社、2008年）および同じ編者により『続「訓読」論——東アジア漢文世界の形成』（勉誠社、2010年）。亦知の伝達とそのメディアに関しては、辻本雅史『思想と教育のメディア史——世日本の知の伝達』（ぺりかん社、2011年）参照。

ジアという空間的な広がり の視点を共有しているということである。さらにそこに、新たな研究領域を開いていこうとする意欲に満ちている、ということも付け加えてもよいであろう。

東アジアという地域が、さまざまな意味で複雑な問題点をはらんでいる現代において、本書に示された研究が実際に直ちに何かの役に立つものではないだろう。しかし研究という知的な営為は、東アジアという地域のもつ意味を深いレベルで理解させ、その理解に根差した今後の方向性を示唆する力が必ずあると信じている。さらに言えば、深いレベルで相互に理解しあえる力をもつ創造的な研究を目指して、今後もわれわれは国際日本研究を追求していきたいと考えている。本書がそのための一助になることを願ってやまない。